「夢は覚めるように出来ている」展覧会：第１回所沢ビエンナーレ― 引込線― (2009) 会場：西武鉄道旧車両整備工場

木炭により野太い線が刻まれ岩肌のように凹凸に造形された紙をかつて鉄道車両が出入りしていた扉のシャッター（5×5M）に設置した作品。（撮影：山田大輔）

Artist Statement

『たけしの誰でもピカソ』（1997-2009）という、ビートたけし司会のテレビ番組を知っているでしょうか？　芸術の敷居を高くする、『才能』という言葉や、インテリチックな専門知識はひとまず忘れて、『ふつう』の目線で芸術を楽しもうというコンセプトの番組です。ドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイスの名言『全ての人は芸術家である』が、番組タイトルの由縁かどうか知りませんが、誰もが『それぞれの新しい毎日を切り開く創造主（＝芸術家）』であるという指摘は、きっと今でも新鮮な『世界の眺め方』を伝える魔法の言葉に違いありません。

芸術に『癒し』の効能があることがよく知られているように、作品はオアシスとして機能したり、常識の盲点に気づかせてくれたり、全く未知の快楽に誘ってくれたりします。さらには政治的なメッセージを言葉以上に伝達し、友達作りのツールにさえなっています。つまり今、芸術とは、『私たちが求めるどんなものでもありえる』わけで、いわば『何でもゲルニカ』なのです。

私は、誰もが、そしてどんな物体も『表現者』であり、どんな物も、さらに誰も彼もが『表現物』でもあるという認識に基づいて世界を眺めます。そうやって、目の前の光の現実を出来るかぎり丁寧に観察し、表現することを試みるのです。

january 2002　h275cm w172cm　鉛筆、紙

作品紹介　死角の眺望 / 軸足の使い方

大町に来てから半月以上の間、雨雨雨で、ちょうど稲刈り時期だったこの頃、夕方の銭湯で耳にする会話もとにかく雨雨雨。見所だらけの大町市、カッパを着込んで走り回る自転車の背景は、気づくと稲穂の黄色い景色。青木湖の底で湧いた水が農具川となって『あさひ AIR』脇を通り過ぎ、高瀬川と合流する。息を飲む鷹狩山のてっぺんからの眺望。粒立つ街並みが東西で大きく立ち上がる連峰に挟まれ広がる。今回、私の作る描画体が設置されるのはそんな場所である。それは連峰であり、何処からか来て何処かへ流れゆく水流の合流地点でもある。また、麓の土蔵では、大町滞在の日々を物語る『軸足の使い方』を展開。

水谷　一　Hajime Mizutani

アーティスト。表現すること、表現されること、表現されないこと、表現されたもの、表現する人について思考する。近年の展覧会に「引込線 2015」（旧所沢市立第２学校給食センター、埼玉県、2015 年）、「憲法を書き展示する会」（gallery&space 弥平、神奈川県、2015 年）、「反戦 - 来るべき戦争に抗うために」（SNOW Contemporary、東京都、2014 年）、「瀬戸内国際芸術祭」（旧三豊市立粟島中学校、香川県、2013 年）等。1976 年三重県生まれ。2003 年多摩美術大学大学院修了。

水谷 一：死角の眺望 / 軸足の使い方
展示場所：鷹狩山山頂古民家 / 蔵（伊藤金物商会所有）
信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展
稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE
２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒 398-8601　長野県大町市大町 3887
（大町市役所　総務部まちづくり交流課内）
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業

水谷 一
Hajime Mizutani
死角の眺望 / 軸足の使い方
View of the blind area / Use of the axopodium

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

水谷 一

Hajime Mizutani / 日本

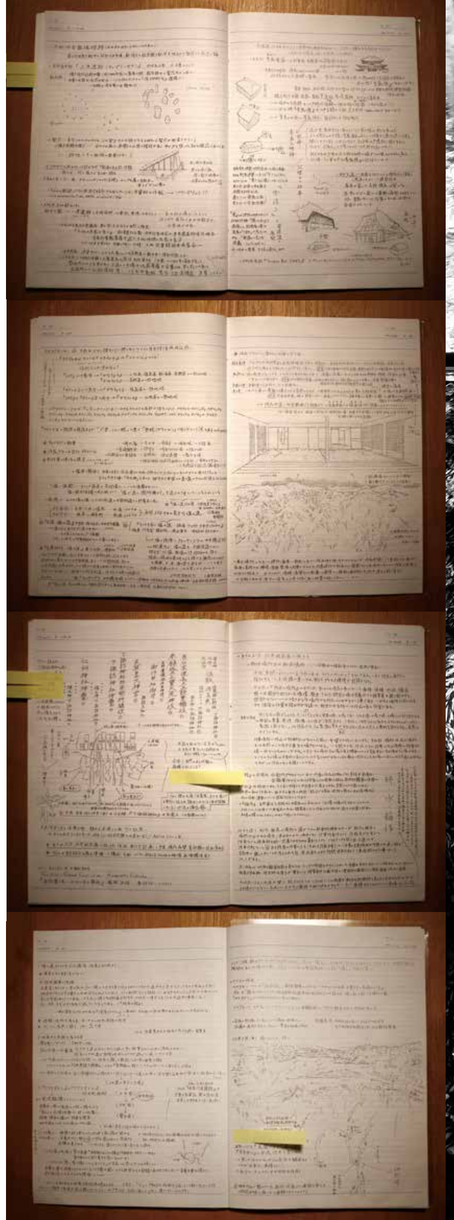
Interview

■信濃大町での滞在制作はいかがですか?
私は様々な場所に滞在し、その場所で表現するという事をやっています。大町に来てしばらくは、自分の興味がいろんな方向に分岐していくのを綱渡りして、場所としても興味の内容としても、あっちに行ったりこっちに行ったりしながら、3 週間くらい過ごさせてもらいました。
例えば、鷹狩山山頂の古民家に半年間、引きこもるとします。そうすると町についてはほとんど何も知る事が出来ないけれど、その古民家という場所にまつわる情報を色々と得る事が出来ます。季節の移り変わりの機微、葉っぱの落ち方、太陽の差し方、どういう風に湿気が這い上がって来て、消えて行くのか、天気や時間によって現れる昆虫の数や種類、そういう細かいことを全部記録していく事が出来るわけです。それはそれで、場所の状態を「知っていく」わけです。私は何を知るかよりも、知るための基軸をどこに置くかについて考えています。基軸の位置、基準をどういう風に設定するかという事で知の質が変わってくる。そういう基準になる条件の一つとして、今回のあさひ AIR では自転車を借りる事が出来たので、それを使って大町の沢山の場所へ行きました。

■水谷さんはなぜアーティストになったのですか?
私は当初、伝えたい事が伝わらないという“もどかしさ“を持たない人、言いたい事を過不足無く 100%表現出来る人が、つまりアーティストなんだと思っていました。そうした存在になる為の訓練としてデッサンがあったり、関門として美大受験があると思っていたし、美術大学に入れば皆、アーティストなんだと信じていたのです。大学に入ってあれっ? て気がつきましたが、全然違いました。美術大学に入ったところで、私は言いたい事を 100%表現出来るようになってはいませんでしたし、周りもそうだったと思います。皆がアーティストなんて事もありません。
夜中、寝る前に、名作が出来た、すごいものを作ってしまった、なんて思って筆を置いた絵を、朝起きて見た時、ひどく未熟に感じてがっかりするという事が、学生の頃はよくありました。また逆に、不出来だと思って放置した絵に数ヶ月ぶりに出会って、その魅力に感心するなんて事もありました。同じ絵を同じ私が眺めてはいますが、それぞれのタイミングで違う価値観が存在しているわけです。同じものを違う方法で見ているという言い方も出来ます。違う方法で見て、それを受け入れる／受け入れない、作品として発表する／お蔵入りにする、描画を続ける／諦めて捨てる、なんていう選択肢がそこに派生的に生まれてきます。夜中にちょっと気分が盛り上がった時に描き出した何かと、熱が冷めた朝、理性的な状態の表現、私は、それを両方とも受け入れる事は可能か、それらを受け入れる為にはどうすればいいか、というところで新しい制作をスタートさせました。

■水谷さんの「描画体」について説明して頂けますか?
描画体とは、私のいくつかの作品傾向を説明する時に便利に使っている造語です。それは確かにいわゆる絵画と呼ばれる物と同様、支持体(キャンバスや紙等) という「地」の上に、「図」としての描画を施しています。ですが、そこで「地」は「図」に従属する存在ではありません。かと言って、彫刻に彩色を施した感じの物とも違います。「地」と「図」の両者は共に自立しながらも混じり合って存在しています。私の作品のこの状態を「絵」と言うのも、「彫刻」と言うのも、ちょっと違う気がしました。でも両方の要素を併せ持っているとも言える。そういう自分がやっている事を簡潔に表そうと考えた時に、「描画体」という言葉はしっくり来たのです。始めに話した「知る方法」と同じように、表現すべき何かを表現する目的で技術を考えるのではなく、技術が表現されるべき何かを生むと私は考えます。技術は物事を知る基準であり、表現の軸足なのです。ですから私の作品にはエスキース（下描き） という概念がありません。全てが本番です。「描くということ」をどうやるかという「方法の構築」が全てです。そうした意味で、私にとって制作とは多く、自分をモルモットにする事なのです。あるルールによって被験体である自分を拘束する。たまに描画体の作品を心電図に例えたりします。ルールによって抽出された人間の生命活動の蠕動。そうした意味で両者は同じものです。

■すべてを現すための偏った表現、なんですね。
一人の人間がする事って、それを誰かに見せるかどうかはともかくとして、どれもこれも表現だと思うんです。洗濯や料理も、その人が受けてきた教育、慣れ親しんだ社会や文化、そうした色々からの影響を受けた一人の人間を通って表に現れて来る物です。でもそれらは多く、残って行く類の物ではありません。日常の積み重ねで人生は出来上がってきているわけだけれども、その一瞬一瞬は決して目に見える形で保存されません。
それはいわゆる美術制作でも同じです。ただ、私の制作の場合は方法に特化して、すべての感覚、行為を肯定していくというやり方なので、ある意味で、制作している一人きりの時間が全部残っていると言えます。ある特定の視点によって偉人の人生を再現していく大河ドラマのような物というよりも、残像、あるいは私の分身に近い物として作品があるのです。
これまでの話と関係ないかも知れませんが、千葉にある川村記念美術館が、シーグラム壁画というアメリカ抽象表現主義の画家、マーク・ロスコの絵のシリーズを持っています。私がそれを初めて見たのはもう 20 年近く前で、その頃はロスコというアーティストについて、まだよく知らなかったのですが、その絵と出会った時、なんだかロスコという人間を丸ごと全部知れたような気分になりました。ロスコというおっちゃんの、まぁ、亡くなった方をおっちゃんっていうのも変な話なんですけど、若いころもあったわけで。ともあれ、本人に会うよりも、本人について知れた気分になる、そういう事がある事を知りました。

美術鑑賞とは、創作者が発信した物を鑑賞者が受け取る事と捉えられがちだと思いますが、私は見るという行為もまた、表現行為の一種であると考えています。ですので私は、いわゆるメッセージの伝達というよりもむしろ、鑑賞者自身の一期一会のタイミングによって、作品という現象をリクリエイトしてもらう事を大切にします。個人が何に価値を見出すかは、その時々で変わって来ます。その変化をもたらす物は、体調かも知れないし、知人の熱っぽい言葉かも知れないし、昨日新聞で読んだ何かかも知れません。いずれにしても、私の作品は、見るという行為が見る人それぞれの独自性を伴った創造行為であるという事を実感する物であって欲しいのです。それはおそらく、喜びであると同時に絶望でもある、どうしようもなく自分しか見れない景色を見ているという手触りです。
ところで自明ですが、自分と自分以外の人が同じ物を同じように見ているか、同じ言葉を同じように扱っているかという事は、厳密には、どこまでいっても確認しようがありません。もちろん、同じ物はある程度同じように見ていて、同じ言葉はある程度同じような感覚で使っている、といったような沢山の約束事を前提として、人は人と関係を作って、そして各々の個別性を保証し合ってもいます。確認しようのない事なんて、考えても結論は出ないわけで、考えてもしょうがない事として、問い自体、忘れられていきます。物心つくとは、この忘却の事を言うのかも知れません。つまり私の作品が目指すのは、物心つく以前の景色の前に立つ事とも言えるのです。

■大町の皆さんに一言お願いします。
今回、「時・水・稲作」というテーマを頂き、必然的に私の滞在も制作も、この三つのキーワードと共にありました。毎日、日付と天気をノートに書いて、気になった事、調べた事、行った場所をメモして、初日から一日一日を踏み締めるように過ごしました。制作の日々の中、一日が 4 ページだったり、五日間が 1 ページだったりして、時間という物の通り一遍でないあり様を身に刻む毎日が今も続いています。9 月はどこへ移動しても黄色い稲の広がりを目は常に拾っていて、そういうのは初めての事ですし、何となく、大町で過ごすほど体はこれまでと違う風に変わってくのだろうなという気分になりました。10 月半ば頃からは、新米が美味しくて、太るなあと思いながらも、ついつい食べ過ぎる日々です。水と言えばまず農具川です。宿舎のすぐ脇を流れてるだけと言えばだけですし、だいたい意識の外ですが、ふとした瞬間に蘇る水流の音にハッとさせられる事もしばしばで、様々示唆を与えてもらいました。本当に短い間での事でしかありませんが、大町の、実に多くのトピックを興味の赴くままに辿り、目的を考えずに思索を巡らして行くという、とても贅沢な時間を頂き、そして、一生懸命作品を作りました。アーティストなんてやっぱり得体が知れないと感じられる方がほとんどだと思いますが、作品を見れば少しは、得体が知れるかも知れません。